

東南アジアの石造建造物と石仏―祈りの芸術―

上智大学歴史文化研究所教授 石澤良昭

一 東南アジアは石造建造物の宝庫

東南アジアの文化を一言で表現するならば、文化の多様性である。この地域の多民族と多言語が文化の多様性を創り出し、有形・無形の文化財の宝庫を創り出している。

そうした多くの文化財の中で、石造の遺跡として有名なインドネシアのボロブドール、ビルマのパガン、タイのスクータイとアユタヤ、カンボジアのアンコール、ベトナムのチャンパなどがあり、これらの遺跡を偉大な過去の東南アジア社会および文化総体として捉えていく必要がある。これら宗教的遺跡や都城という石造りの壮大な伽藍は、寺院・仏塔・僧院とともに一つの宇宙世界をこの世に具現したものであり、当時の人々の最高の価値観を凝集した歴史的モニュメントでもある。これらの遺跡は栄華の証しを残しているが、それを保存修復する意義は、まず破壊から遺跡を守り、現状を維持しながら、後世に伝えていくことであり、この点については議論が尽くされている。

これら石造建造物は当時の歴史、建築、美術、水文諸技術、宇宙観などを内包した当時の「生」の資料であり、未解決の歴史・文化・社会などの問題を究明する重要な手掛かりでもある。これらの文化遺産の研究と保護活動は、東南アジアの人々の個性豊かな民族の伝統と歴史的創造の成果を検証することになるであろう。

二 石造建造物は民族の誇りと伝統の象徴

仏跡ポロブドールは、一九六七年にユネスコが救済のアピールを出して十六年の歳月がかかり、一九八三年二月に修復工事を終えた。その経費は総額で、二千万ドルにもほり、日本からはその一割強に当たる二三〇万ドルの募金を送られた。

ビルマのイラワジ川中流域にあったバガン朝は、十一世紀から約三百年にわたり栄え、建寺王朝といわれるほどたくさんの寺院が現存する。そのバガン都城跡・仏塔寺院遺跡が一九七五年七月八日にマグニチュード八の大地震に見舞われ四十四カ所の遺跡が損壊し、他に七十一カ所の仏塔の一部が倒壊した。緊急に修復しなければならぬ四十四仏塔遺跡のために、ビルマ政府の呼びかけで、ユネスコ、日、仏、西独などの技術、財政の援助と協力し、一九八二年四月に緊急の修理を終えた。日本からは一九七七年に機材購入資金として二千五百万円が文化無償協力により供与された。

タイ民族文化の源流といわれる十三世紀のスコータイ遺跡は、バンコックから北へ約五百キロのところにあり、旧王宮跡を中心に、百カ所あまりの遺跡が残っている。タイ政府はこれら遺跡を史跡公園として整備するプランを建て、ユネスコがこれを支援してきた。一九九二年に完成したが、日本はユネスコを通じて、修復機材購入基金などに総額一億円以上を供与してきた。

ベトナムは一九七五年に約三十年にわたるインドシナ戦争を終えたが、平和到来で文化財の保存修復が可能となった。十六世紀以来阮朝の居城であった旧都フエ(Hue)には、王宮跡や廟・仏塔などの文化財があり、北部のフォンソン(Huong Son)、ダナン近くのホイアン(Hoi An)などの保存修復などのプランが立案されている。また、ベトナム中南部から南部にかけての沿岸地域には、三世紀からのチャンバ王国の遺跡群があり、塔堂様式のレンガ建築で有名である。秀麗な破風彫刻や浮き彫り、寺院跡などは荒れるにまかせており、一九四〇年代に保存修復活動が戦争のためできず、その後のインドシナ戦争でも放置され現在に至っており、本格的な救済活動が望まれているところである。